

図書館だより 二〇十三年 六月増刊

ふるさとの風 水無月

幻の宮  
齋宮

伊勢市立伊勢図書館 ふるさと文庫



水無月は陰暦六月の異称。

現在の陽暦に直すとほぼ七月に当たる。

梅雨が終わって暑気が水を涸れ尽くすところから水無月…。

田に水を張る月という意味の水張り月…。

また風待月ともいい、暑さに涼風を望む意味がある。

ふるさとの風

夏への誘い…

水無月



いのちを潤す長雨の季節…

生物の歓びを感じて  
光溢れる夏を迎える

## ～ 幻の宮 齋宮 ～

夏は夜。月のころはさらなり、闇もなほ、螢のおほく飛びちがひたる。

また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

～ 枕草子 ～

「今年の齋王代はどなたどすやろ」

京都に初夏の訪れを告げる葵祭。新緑まばゆい都大路を古式ゆかしい行列が進む。

それから半月後の六月初旬、紅の森に螢が飛び交う頃、伊勢神宮から二十キロあまり離れた齋王の森でも王朝絵巻さながらの雅びな行列が再現される。

輿に乗った主役の齋王を中心にした一行が麦秋を迎えた野辺の道を進んでいく。

齋王群行である。

齋王とは、天皇に代わって伊勢神宮に仕える未婚の女性をいう。

奈良時代から室町時代まで天皇の即位のたびに占いで選ばれ、都から伊勢に遣わされた。

起源は豊鍬入姫命とよすきいりひめのみことや倭姫命に遡るともいわれる。

実在した最古の齋王は、万葉集にも歌人として名を残す天武天皇皇女の<sup>おおくのひめみこ</sup>大来皇女で、最後の齋王は後醍醐天皇皇女祥子内親王である。この制度は約六百六十年間続き、六十余人の齋王が実在した。

平安時代中期に編纂された延喜式の齋宮式によると、齋王は新しい天皇が即位した直後に「卜定」と呼ばれる占いの儀式で選ばれた。

選ばれた齋王は賀茂川みそぎで祓禊をして宮中の初齋院に入り一年間、平安京郊外嵯峨野ののみやに設けられた野宮に移ってさらに一年間の潔斎の日々を送る。

そして三年目の秋、神嘗祭に合わせ伊勢へと旅立つ。

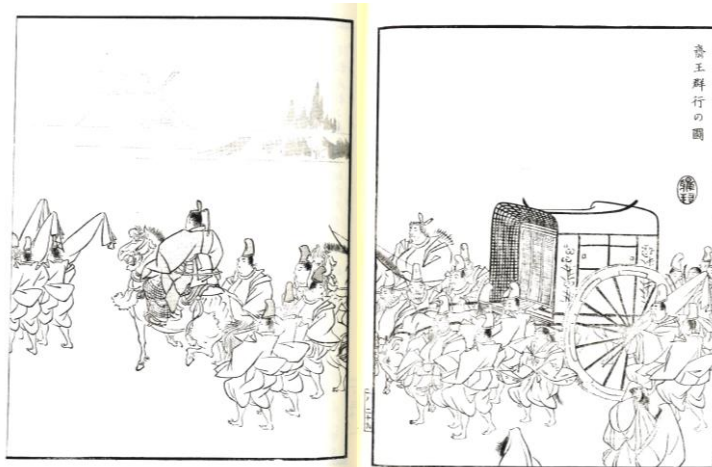
野宮を出た齋王は葛野川みそぎはらえ（桂川）で禊祓をし、深夜に平安宮大極殿で天皇と対面し、<sup>ほっけん</sup>祭遣の儀に臨む。この時、天皇は齋王の額髪に黄楊つげの小櫛みやこを挿し「都の方に趣おもむき給ふな」との勅語を下す。

その後、齋王は振り返らずに都を出るのが慣わしであった。

この儀礼は齋王が天皇の手元を離れ自立することを象徴していると考えられ、「別れの小櫛」の名で知られている。

京の都を深夜に出た一行は近江の勢多、甲賀、垂水、伊勢の鈴鹿、一志の“頓宮”（仮設の宿舎）を

経て、六日目に齋王の御所伊勢齋宮に至る。その後齋王は初めての務めである神嘗祭に参加するのである。この旅は官人、官女や天皇の勅使など総勢五百人余がつき従う壮麗なもので「群行」と呼ばれ、天皇の代行者である齋王の行列は人々の目を驚かせ天皇の権力を知らしめるものとなった。齋王が任を解かれるのは天皇の退位や崩御、あるいは齋王の病気や親族の不幸の時に限られ、凶時による場合は往路とは別の伊賀から大和を経るルートで帰京した。



『神都名勝誌』巻一下 群行

齋王のつとめは伊勢神宮の最も重要な祭祀である九月の神嘗祭、六月と十二月の月次祭の「三節祭」に赴いて奉仕する事である。

齋王は儀式の前日に齋宮を出て神宮と齋宮のほぼ中間にある離宮院（小俣町）に入り、翌日宮川で禊をして外宮の大祭に奉仕し、離宮院に戻り宿泊する。

そして翌日御裳濯川（五十鈴川）で禊をし内宮の大祭に奉仕し、再度離宮院に戻り宿泊し齋宮に帰るのである。また日常は齋宮内で厳重な潔斎生活を続けていたが、祭祀の他に歌合や貝合、曲水の宴も催され、宮廷さながらの雅な暮らしを送るひと時もあったようである。

尚、神嘗祭の前月の八月晦日には尾野湊（明和町大淀の海岸）、月次祭の前月の五月と十一月には竹川（被川）で禊を行う事が定められている。

齋王制度は、天皇を中心とする律令国家を権威づけるために必要な制度であった。

奈良時代から平安時代にかけて盛衰を繰り返し、鎌倉時代に武家政権の成立により著しく衰退。

六百六十年続いたこの制度は、南北朝時代に終焉をむかえたのである。

齋宮は“いつきのみや”とも呼ばれ、齋王の宮殿である内院と齋宮寮長官の官舎である中院、十二の司からなる役所たる外院で構成され、都からの官人を含む五百人余の人々が働いていたと推測されている。長い間「幻の宮」とされてきた齋宮が発見されたのは昭和四十五年（1970）。

明和町竹川の古里地区の宅地造成時においてである。

その後調査の進展とともに東西二キロ南北七百メートル面積百四十ヘクタールの広大な範囲が国の史跡に指定された。

さらに史跡東部では奈良時代末期に整備された東西七列、南北五列の碁盤目状の区画が確認され、齋宮跡は想像を超えた広大な遺跡であることが明らかになってきた。

また数多くの出土品も発掘され、往時の齋王の宮の全容解明に重要な手がかりを与えている。

都から遠く離れた伊勢の地で、神に仕える皇女齋王は神秘的な存在として王朝物語にたびたび登場し彩りを添えている。

“むかし男ありけり。”の書き出しで有名な『伊勢物語』第六十九段の狩の使いでは、在原業平と齋王の恬子内親王のはかない逢瀬が描かれている。

君や来し われやゆきけむ おもほえず 夢かうつつか 寝てかさめてか

恬子内親王が詠んだこの歌は「詠み人しらず」として古今和歌集にも載せられている。

『源氏物語』賢木の巻に登場する六条御息所と秋好中宮と呼ばれた娘の齋宮女御は、徽子女王と規子内親王がモデルであったといわれている。

その他にも『栄華物語』の当子内親王、『増鏡』『とはずがたり』に登場する恬子内親王など、いずれも悲恋物語の主人公として描かれている。

また万葉集では大来皇女が弟大津皇子の悲劇を幾度も切々と歌に詠んでいる。

次の歌は大来皇女が齋王の任を解かれ京に上る時、大和の飛鳥の地で弟の死を悼んだものである。

神風の 伊勢の国にも あらましを なにししか来けむ 君もあらなくに

万葉集 卷二・一六三

毎年齋王まつりの頃、東野の笹笛川右岸の沼地で野花菖蒲が見頃を迎える。

地元で通称どんど花と呼ばれるこの群落は国指定天然記念物。

咲き誇る紫紺の花が人々の目を楽しませている。

すでに江戸時代には自生していたと言われ、古書には花どきになると紫の雲がたなびくように美しい眺めであったと記されている。

六月半ば、月次祭。齋王は神に祈りを捧げる。

気品漂う野花菖蒲に齋王の姿を重ね合わせる。

襖をしたという大淀の海岸から吹く初夏の風に身を委ねる。

「幻の宮」は確かにこの地に存在した。

夏至も通り過ぎた六月晦日、

京都上賀茂神社境内の御手洗川では夏越の祓が行われる。

風そよぐ 櫓の小川の 夕暮は 御襖ぞ夏の しるしなりける



『神都名勝誌』 卷一下 どんど花

——季節は夏本番を迎える。

図書館だよりNo.136 増刊 平成 25(2013)年 6 月 1 日発行

(編集・発行) 伊勢市立伊勢図書館 指定管理者/株式会社 図書館流通センター (住所) 〒516-0076 伊勢市八日市場町 13-35  
(電話) 0596-21-0077 (FAX) 0596-21-0078 (ホームページ) <http://iselib.city.ise.mie.jp/>